

3 空は青く雲は白く、輝く幸せな陽と深く荘重な夜と

亮は天幕の天井を睨んだ。

すでに日は落ちたというのに、花が戻ってこない。亮が少し天幕を離れた隙に、張宝に話があると呼び出されたいらしい。

一緒にいたら間違ひなくついていくのだが、亮一人では例え花がそこに居ようと張宝の元へは通してくれない。仕方がないので、本を読みつつ花を待っていたのだが、それにしても遅い。

…まさか晏而にひっかかったりしてないよね。不安に襲われた亮は、花を迎えに行くために天幕を出た。

張宝の天幕へ行ってみると、随分前に花は帰ったという。

これはいよいよ晏而に捕まっているのかもしれない。亮は走り出した。

まずは、青州出身の男たちが集まっている天幕をのぞいてみる。

「お、亮じゃねえか」

入り口から顔を覗かせると、目敏く晏而が声をかけて

きた。

「道士様はどうした」

「ううん、ちよつとね」

天幕の中には、他に見知った男たちがいて、季翔も「う」と手を挙げてくれるが、花はいない。

晏而に花を探してもらうことも考えたが、花が誰にも告げずに一人で勝手に外へ行くことは考えにくい。野営地から出ていないのであれば、花に危険が迫っているわけではない。

だとしたら、それほど急ぐ必要もないはずだ。

晏而に花を探すのを頼んで、晏而が一人で花を見つけだし、そのまま花と二人きりで……というのはあまり考えたくはないが、十分起こりうることだ。そっちの方が危険だ。

もう少しだけ自分一人で探してみよう。

晏而を適当にごまかして、亮は天幕を離れた。

心当たりのある天幕を幾つか覗きながら、亮は野営地の端にまで来た。

そこでようやくやく、探していた人物の後ろ姿を見つけた。

暗がりでもかすかに光っているような桃色の外套を来た少女——それでも亮よりかは年上の女性だ。

花は座り込んで上を見上げていた。

「花！」